

# 戦後日本社会の50年

——21世紀の入口に立って——

沖 浦 和 光

## 1 戦後50年の節目で

20世紀は「戦争と革命の世紀」と呼ばれているが、世界的に大動乱があいついだ波瀾万丈の百年だった。私は1927年の生まれである。したがって、第二次世界大戦をはさんで、日本近代の激浪の渦中を生きた世代である。

敗戦の年、私は18歳だった。8月15日は、学徒動員されて働いていた池田市のダイハツ工場が爆撃で破壊されて休みとなり、母親と妹の疎開先である大和の二上村に行っていた。鎮守の森の広場で、村人と一緒に天皇の無条件降伏の放送を聞いた。その衝撃がおさまらぬまま、何かに駆られたような勢いで、すぐ近くの二上山に登った。しかし、戦争中の荒廃で草茫々、登山道も定かではなかった。

どこにも人影はなく、全山静まりかえっていた。雲一つない夏空、はるか彼方まで大和平野が望見できた。何事もなかったかのように、静かな田園風景が眼下に広がっていた。風が吹き抜ける山頂には、小さな大津皇子の墓が、時の流れに取り残されてひっそりと立っていた。その苔むした墓を背にして、夏草の上に座り込んで、「これからの日本はどうなるのだろうか」と、しばし感慨にふけたことを昨日のことのよう覚えている。

それから、戦後の〈疾風怒濤の時代〉が始まった。軍部ファシズムに支え

られてきた天皇制をはじめとして、戦前の国家体制や思想体系は轟音を立てて崩壊していった。そして、再建日本は、焼跡に漂う硝煙をたくみに吸い取りながら、「技術革新と経済成長」を合言葉に、〈新版・脱亜入欧〉路線を息せき切って突っ走った。

私の幼少期には、まだあちこちに旧来の習俗や儀礼が残っていた。古い時代に、中国大陆や朝鮮半島から伝来したものも少なくなかった。近世文化の余影もまだ残存していた。そのいくばかは、室町時代からの日本文化の基層に関連するものだった。人と人とを結びつける紐帯も、地域に残る共同体の伝統に根ざしていた。

しかし、古い伝統文化や宗教的習俗は、アジアの各地を侵略した「巨大なモンスター・日本帝国主義」を、下から支えてきた負の遺産とみなされた。〈戦後民主主義〉を合言葉にして育ち、〈アプレ・ゲール〉と呼ばれた私たち若い世代は、伝統文化をしだいに見捨てていった。

そのような負の遺産の最たるものは天皇制である、という問題意識がしだいに浮上してきた。「大日本帝国ハ万世一系ノ天皇之ヲ統治ス」(旧憲法第1条)、「天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス」(同第3条)——そのような大命題をもって私たちを呪縛してきた天皇制なるものは、古いアジア的生産様式が産み出した遺物に外ならぬという共通認識がしだいに広まっていったのである。

それと同時に、日本帝国主義に正面から立ち向かった戦前派社会主義の諸グループの復権が急浮上してきた。復活した左翼と入れ替って、天皇制ナショナリズムの旗の下でアジア侵略を鼓吹<sup>こすい</sup>していた右翼イデオログがジャーナリズムから追放された。つまり、復権した左翼が、運動面のみならず言論界においても大きい地歩を占めるようになったのである。

戦前の抵抗運動についてはその存在すら知らなかった私たちは、瞠目しながらその主張に耳を傾け、やがて私たち戦後派もその洗礼を受けることになった。私の通っていた旧制高校でも、敗戦2カ月後には社会科学研究会が組織

された。そして、マルクスの『ドイツ・イデオロギー』をテキストにして、数人で勉強会が始まった。

再建日本は、新憲法のもとに〈西洋型市民社会〉を目指して急発進した。凄まじい軌み音をたてながら闇雲に突走った。50年代、60年代、70年代、80年代と、いくつかの大きな曲がり角をどうにか乗り切って、20世紀末の今日までたどり着いた。

近ごろ、戦後の半世紀を踏まえつつ、20世紀全体を回顧するさまざまな言説が相次いでいるが、私見では次の三点を忘れてはならないと思う。

その第一は、「前史なくして本史は成立しない」という自明の理だ。すなわち、“戦後日本の変貌”を論じる際には、19世紀初頭の文化文政期からの、百年間にわたる「大転換」を前提にして、日本近代史の展開過程を精緻に跡づけていかねばならない。すなわち、世界史上でもきわめて特異な近代化革命であった明治維新は、一朝一夕で出来上がった社会体制の変革ではないということである。

特に化政期からの大衆社会状況の成立が重要である。それを基盤とした、町人文化と賤民文化に代表される新しい民衆意識の台頭を念頭において、新たな視座からの明治体制の成立論を展開していかなければならない。世界でも有数の出版点数を誇る近世ジャーナリズムの形成、水準の高い商業流通信用制度と交通・情報網の形成、そして約2万の寺子屋に見られるような民衆レベルでの識字率の高さは、当時の西欧社会に決して劣っていなかった。そのような「前期的市民社会」とも呼べる大状況を前提として、維新後の日本社会は、それまでの〈アジア文明系〉から〈西洋文明系〉に乗り換えるという、世界史でも稀な軌道変換をやり遂げたのであった。

第二は、〈官〉の側ではなくて、〈民〉の側によって創造された近世民衆文化の巨大な蓄積を、日本の近代史の中でどう位置づけるかという問題である。さらに言えば、維新後の〈官〉主導による西洋文化の導入と、国民の価値意

識を統合するための天皇制ナショナリズムの成立—そのような新体制を形成していく過程で、近世文化の発展過程において培養されてきた民衆の社会生活や思考能力がどのように支配体制の中に組み込まれていったのかという問題である。

第三は、有名人が次々に登場する近代史の華々しい表舞台だけではなく、社会の舞台裏にも目を注ぐことである。多くの民衆は精一杯働いて生きていたが、その大半は青春の志を果たすこともなく、数々の未練と怨念を残してこの世を去って行った。それぞれの人生の軌跡には、一体何がどのように刻み込まれていったのか。激しく揺れ動いた社会の底流には、ハレ舞台では何も残すことはなかった民衆のしかばねが累々と横たわっていたのである。

このような三つの視座を欠いた「20世紀日本」論は、目まぐるしく生起した近代日本の大事件の表層をなぞっただけの、厚みのないものになってしまうに違いない。

## 2 躍進ニッポンの〈光〉と〈闇〉

戦後日本の目を見張るような経済成長は、確かに「世紀の奇蹟」の一つであった。近代西洋文明を必死で追走しながら、戦後50年の今日、ついにそのトップ・グループに躍り出たのである。

70年代に入ると、やがて到来する「情報化社会」のイメージが華やかに語られるようになった。構造主義と記号論を基調として、「ポスト・モダン」論が流行した。そして80年代に入ると、西欧先進諸国にも見られぬ経済の高度成長を背景に、一億総「新中間層」論が声高に叫ばれた。古典的プロレタリア像は姿を消し、貧乏が発奮のエネルギーに転化するという状況も消え失せた。

だが、80年代の終わりにさしかかるころから、生産力の無限上昇、バラン

スのとれた最適社会への発展という戦後神話も急に色褪せてきた。

すなわち、「自然の破壊」「環境・食糧・エネルギー問題」「共同体的人間関係の解体」という大きい代償を払いながら、先進工業文明の光と闇を同時に見ていることに気づき始めたのであった。

〈輝く文明社会〉と予想された21世紀も、目前に迫ってみれば、混迷と閉塞が立ちはだかる「出口なし」の状況であることがしだいに分かってきたのだ。生きる目標とアイデンティティーを見失った若い世代の浮遊が始まり、旧来の家族制度の崩壊の中で高齢者層は行き場がなくなってきたのだ。

このように激しく移り変わる時代状況とともに、私たちが抱いてきた問題意識も、次々に新しい次元で噴出してくる問題領域に立ち向かうことになった。そのことについては、末尾にある「戦後日本社会における〈パラダイム変転〉の見取り図」を参照していただきたい。わが戦後体験にもとづいて作成したのでかなり主観的なものになっているが、私たち戦後世代における思想の変遷がそのまま投影されているのである。

私にとって一つの大きい転機となったのは、1970年代初頭の西洋留学であり、その帰途初めてインドに立ち寄り、その翌年にアフリカを訪れたことであつた。それから毎年のようにアジアの各地を訪れるようになったが、それはおもに辺境・未開とされた先住民族の土地であつた。このような過程で、近代西洋文明を一つの理念型として考え、西洋中心の一元的な歴史進歩史観の大枠を出ることがなかった私の歴史観が、大きく揺さぶられることになった。

20世紀末の今日、人類史は大転換期にさしかかっている。米ソ冷戦の終結、南北格差の解消を目ざす新経済体制の創出、西欧経済圏の衰退とアジア新興国家群の躍進など、政治・経済の次元での構造変動だけではない。

人間の生命活動に意味を与えそれを価値づけてきた〈文化〉体系、それまでの社会生活の様式を規定してきた〈文明〉モデル—それらが根底から問い直されつつある過渡期であり、流動期であることがはっきりしてきたのだ。

15世紀の大航海時代以来、軍事力を背景としてアジア・アフリカ・アメリカの各地に進出して、人類史の一地平を画してきた西洋文化にも、大きいカゲリが見えてきた。ヨーロッパを源流とした〈近代文明〉の瓦解状況は、今日では誰の目にもはっきりと見て取れるようになってきたのである。

近代資本主義が切り開いた世界秩序を乗り越えるために、人類史の新たな構想のもとに出現した社会主義体制も、ロシア革命後半世紀を経過して、もろくも瓦解していった。

党＝国家という融通自在なシステムのもとでの少数の自称エリートによる官僚主義的独裁、民衆の多様な個性の発展を閉ざす画一主義、情報流通と表現の自由の徹底した統制——これらに代表されるように、19世紀前半に若い革命家たちが心に描いてきた理想像とは全く異質な、粗野で硬直した巨大な管理社会が出現したのであった。私たちが50年代後半から指摘し始めたように、国家社会主義と見間違えるようなスターリニズムの自己解体は、まさに時間の問題であった。

そのような旧社会主義体制の崩壊も、近代文明の解体と同次元で論ずべき問題であろう。しかしながら、初期の社会主義者たちが苦闘しながら考えた「人間社会における自由と平等の実現」をめぐる思考と理念が、すべて無効だったわけではない。その「初心」のいくつかは、必ず21世紀へも引き継がれていくだろう。

### 3 文明モデルの転換

今日、(1)未開→(2)半開→(3)文明という、これまで常識とされてきた単線的な人類進歩史観の是非が根本から問われている。

「21世紀はアジアの時代」と言われているが、自然風土に根ざした文化の多様性を尊重しつつ、諸民族の発展の独自性を認めていかねばならぬ時代が

やってきている。20世紀において世界の主流となっていたキリスト教西洋文化に対抗して、イスラム原理主義による新潮流が形成されつつあるが、そのように簡明率直な宗教原理を対置するだけでは、とても未来は見通せない。

つまり、単純な「文化相対主義」の視座だけでは、21世紀における人類世界のあるべき姿、その統合的ヴィジョンを構築することはできないのである。「ポスト・モダン」を掲げた思想の新潮流は、部分的には有効な方法論を提起したが、総体としては〈近代文明〉の地平を乗り越える展望を提示できないまま、転換期の大波濤の中に呑み込まれていった。

もちろん、人類の進むべき方向は、人知ではかり知ることのできぬ「神の見えざる手」によって定められているわけではない。近代の入口において、かつてヘーゲルが構想したように、1.「普遍的なもの（人類全体の共通課題）」、2.「特殊なもの（我々の場合はアジア人としての課題）」3.「個別的なもの（我々の場合は日本民族としての課題）」というように問題をたてねばならない。そして、それぞれの次元において、改めて現代の問題状況を個別に分析しながら、それを統合して考える全体的視座と新しい方法論を構築していかなければならないのである。

21世紀のキーワードとして次の6つが指摘されている。(1)平和と軍縮、(2)自然と環境、(3)ハイテク情報化、(4)社会的公正、(5)国際化時代における共生、(6)新しい人権の時代。

そのような問題状況を踏まえて、21世紀文明のあり方を展望するとき、思いつくままに並べてみても、この日本社会ではさしあたり次のような諸課題が検討されねばならない。しかも、これらの諸問題は、相互に構造的に深く絡みあっているのである。個々の対症療法では、とても解決できぬ大きい課題である。

特に自然のあり方と深くかかわる文明系の諸課題は、日本だけで個別に解決できる性質のものではない。アジアに生きる諸民族の一員であるという自

覚のもとに、21世紀における新しい世界像を模索しつつ、人類全体の新しい生き方を考究する中で、私たちの未来の生き方を探らねばならないのである。

#### 4 20世紀末の現実—当面する諸課題

- 1) 地球の全域に及ぶ自然生態系の危機と環境問題
- 2) 自然資源・エネルギー枯渇問題の顕在化と人口・土地問題—特に第三世界における人口爆発と食糧危機
- 3) ハイテク社会における電子メディアによる情報ネットワークの形成、その反面での人間疎外の深化
- 4) 共同性を喪失した市民社会—砂のごとくバラバラの人間関係
- 5) さまざまな法的規制にもかかわらず、女性の社会的地位は依然として低いという歴史的・社会的課題
- 6) 先住民族アイヌの問題、部落差別・障害者差別・女性差別・外国人差別・いじめ問題など、日本社会に残るさまざまの人権問題
- 7) 先進諸国における構造的不況と雇用不安の増大、日常風俗の多様化と特に若い世代の価値観の紊乱現象
- 8) 高度消費経済—異常にふくれあがった無駄な消費欲望と偏差値中心の瘦せた冷たい競争社会
- 9) 生きる目的の無化、価値意識の拡散化、国家や企業に対する忠誠心（ロイヤリティ）の喪失
- 10) 高齢化社会—伝統的家族制度の解体、中高年層の孤独感と生活理念の喪失
- 11) 〈生〉と〈死〉をめぐる宗教的意味づけの根本的な問い直し
- 12) 文明モデルの転換—新しいライフ・スタイルの理念、それを実現していく道筋をいかにして創出していくのか



戦後日本社会における「パラダイム変転」の見取り図

	社会モデルについてのトータル・イメージ	歴史意識における主要な問題関心	人間関係論における主要なテーマ	世界と日本をめぐる問題設定の枠組	社会発展の志向性をあらわす問題状況
1950年代	近代化社会	アジア的後進性と西欧社会の先進性	近代的自我の確立	新版・脱亜入欧	戦争責任と戦後民主主義
1960年代	大衆社会	歴史法則と個人の営為	国家・階級・個人	西欧近代文明のモデル化	技術革新と経済成長
1970年代	管理社会	市民社会と共同体	組織と人間	南北問題の尖鋭化(先進国と第三世界)	ハイテクノロジーと最適社会
1980年代	情報化社会	自然生態系と生産力	物象化と自己疎外	「中心」と「周辺」(文化相対主義)	近代的価値意識の解体とポスト・モダン
1990年代	国際化社会	歴史の多系性文化の多様性	新しい人権の時代	人類史像の再構築	生物共同体としての地球と「共生」の思想

\*paradigm=ある集団の成員が共通して持つ「信念」「価値観」「時代思想」などの全体像  
(理念モデル, 理論範式, 思想の枠組などをあらわす)

\*この「パラダイム変転」の見取り図は、わが戦後体験にもとづくきわめて私的なデッサンである。

\*この最終講義は、1回生を対象とした共通教養科目である「日本近代社会の構造と特質」の最終時間(1月9日)に行った講義である。その際に配布したレジュメにいくらか加筆した。